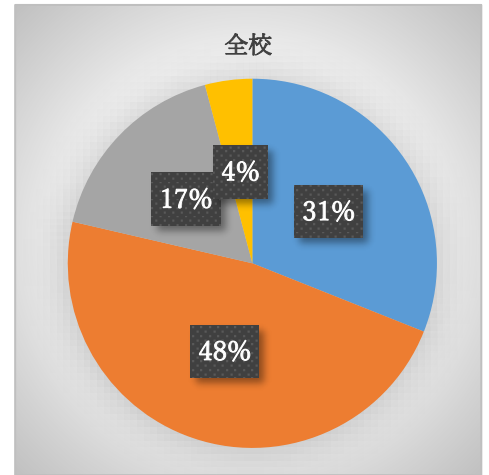
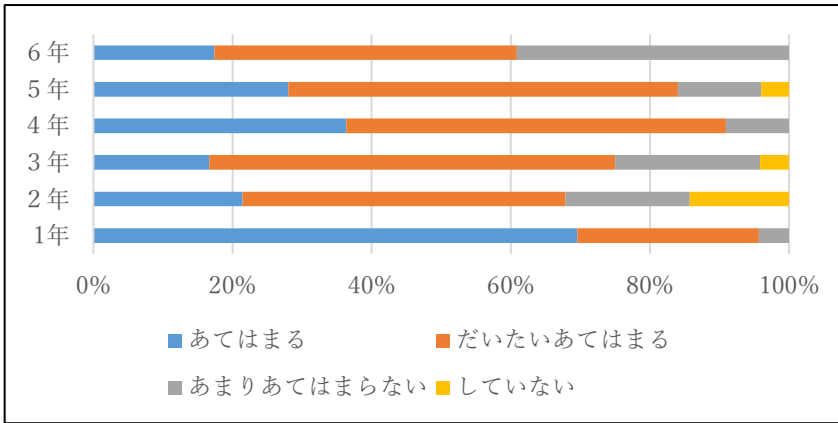


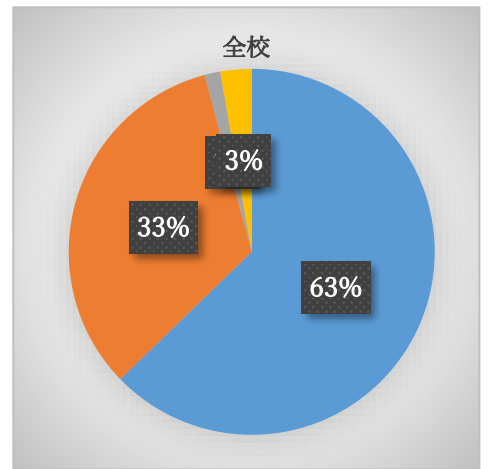
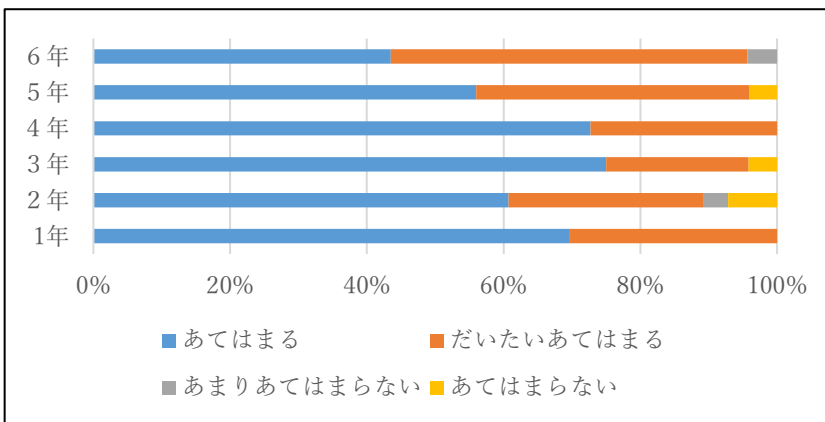
### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 算数アンケートの結果

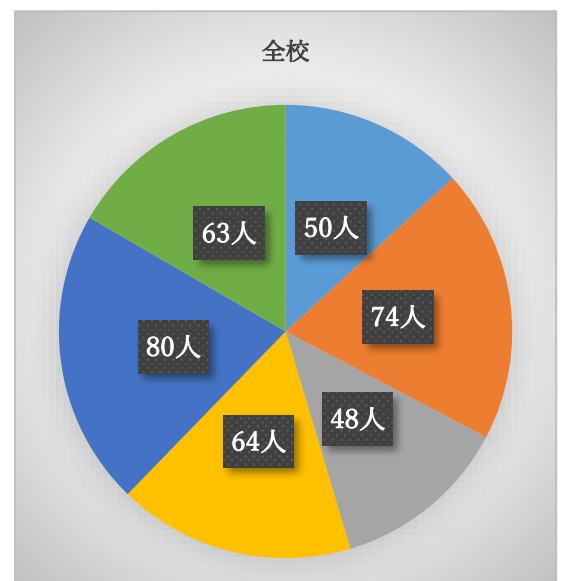
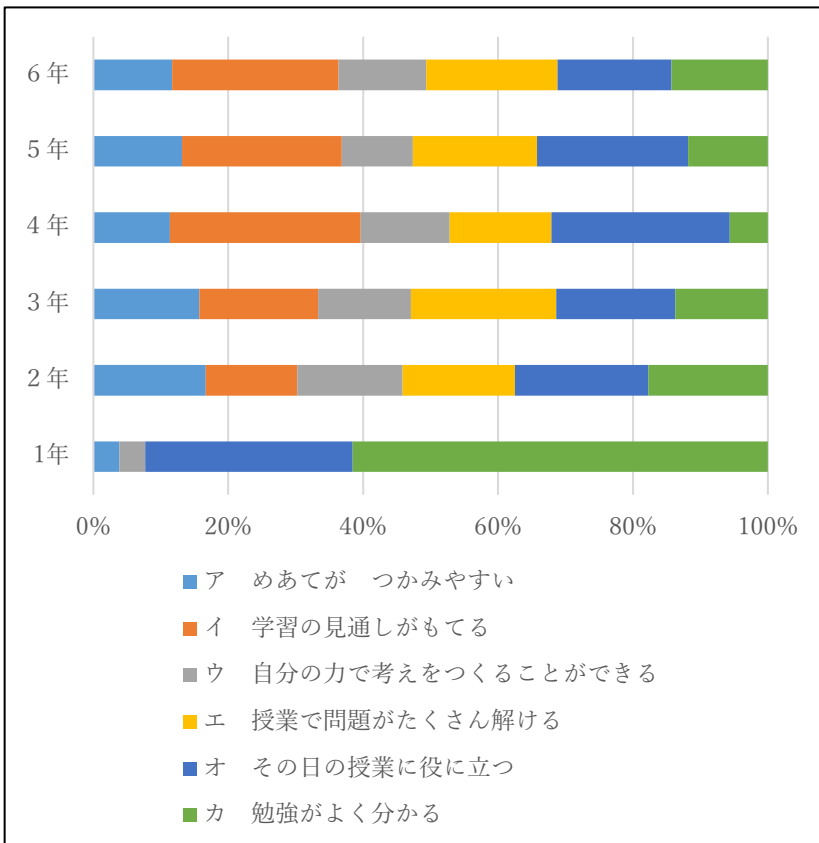
##### ① 算数チャレンジをしていますか



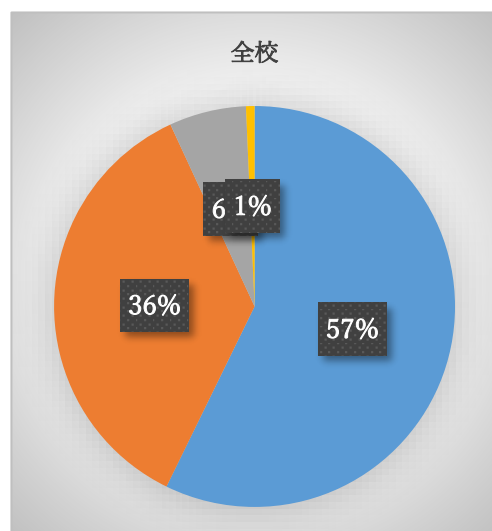
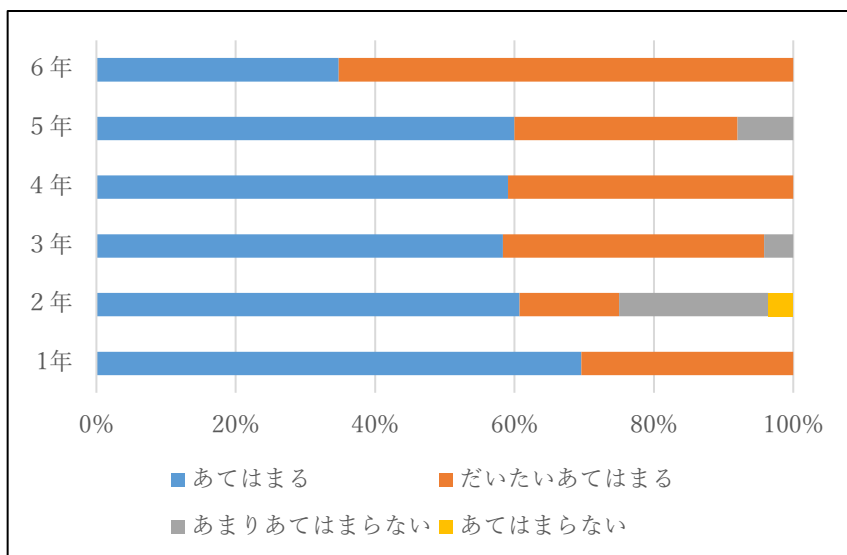
##### ② 算数チャレンジは役に立っていると思いますか。



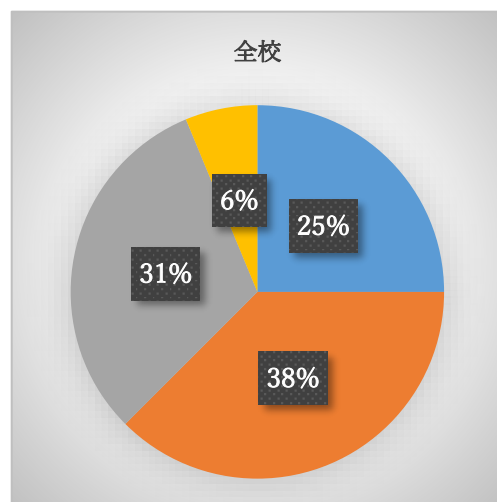
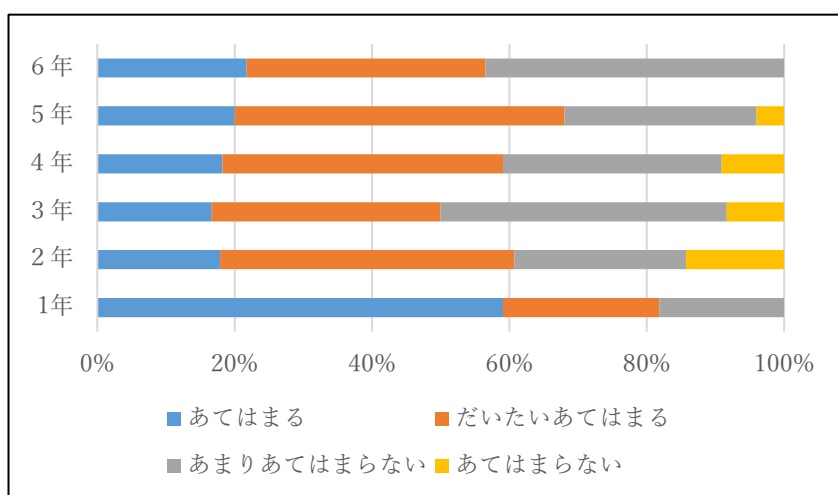
##### ③ 算数チャレンジのいいところはどこですか。(複数選択可)



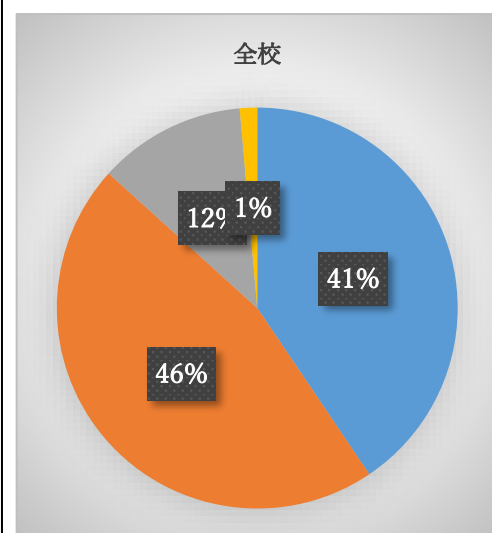
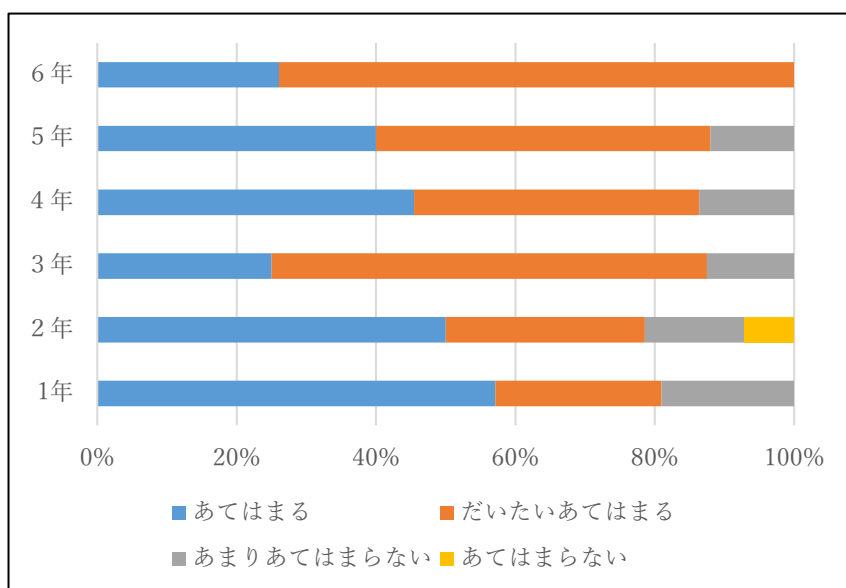
④ 授業の内容はよく分かりますか。



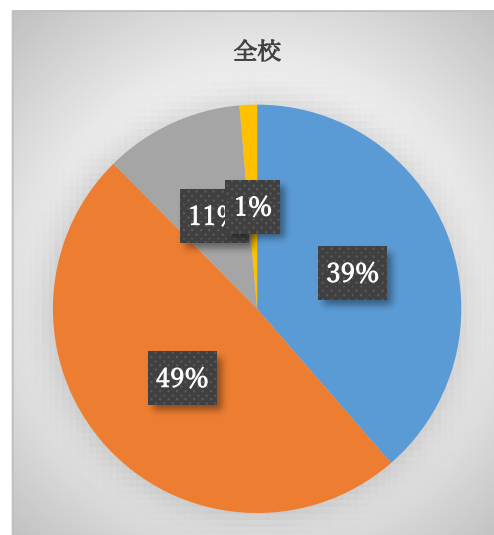
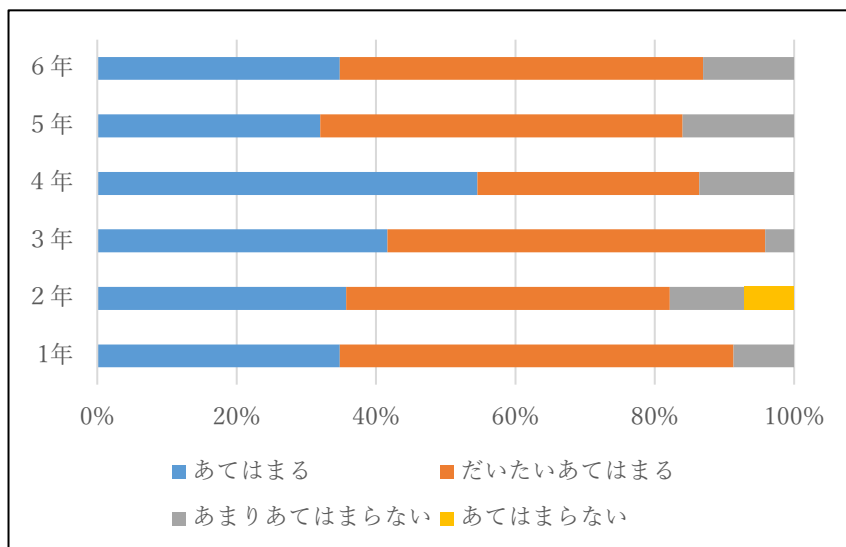
⑤ 自分の考えを理由を言いながら友達に説明することができますか



⑥ 友達の発表と自分の考えを比べて、よりよい考えを見つけようとしていますか。



⑦ めあてや大切な言葉をもとに学習のまとめを考えることができますか。



## 2 成果と課題

本年度、「主体的に学び、解決に向かって進んで表現する児童の育成～算数科における『算数チャレンジ』を生かした学習指導を通して～」を研究主題に校内研究を行ってきた。以下は各学年の算数チャレンジ・数学的表現活動の工夫の取り組みで明らかになった実態や、児童意識調査及び職員アンケートをもとに、成果と課題をまとめた。

### (1) 成果

キーワード：見通し、自信、抵抗感の軽減、学習意欲の向上、テンポ、全体交流や習熟の時間確保、学びの自己調整力、個別指導、思考の整理、多様な表現活動（操作的表現、映像的表現、記号的表現）、協働的な学び、自己選択・自己決定、

- ・算数チャレンジは、家庭で取り組むため、児童は自分のペースで題意の把握や理解を行うことができた。児童はその日の学習に対する見通しが立っているため、学習や問題へ対する自信をもって授業に臨むことができたり、授業に対する抵抗感が少なくなったりした。児童意識調査においても、「見通しをもつことができる」「その日に役立つ」など、児童の肯定的な意見が多数見られた。
- ・教師は授業において、導入部分の時間短縮ができテンポ良く授業を進めることができるようになった。自力解決後の個別対応、一対一での交流や全体交流、習熟の時間を多く確保できるようになった。また、算数チャレンジの理解の状況を教師が把握することでそれを生かした授業が展開できた。
- ・高学年においては、授業の中で、習熟後に算数チャレンジの時間を設けることで、算数チャレンジの方法が共有され習慣化につながった。また、算数に苦手意識のある児童も学校で取り組むことで、友達と学び合いができ、課題を把握したうえで授業に臨むことができるようになった。また、習熟の時間が確保できたことで、その時間に「ミニ先生、計算ドリル、タブレット活用、発展プリント」など、必要な学習活動を各個人が選択・決定する機会を設定することができた。
- ・内容の理解度が高まったり友達との交流の時間が増えたりしたことで、自分の考えを「図、式、言葉」で表現できる児童が増えてきた。
- ・「授業公開週間」の取り組みでは、放課後に職員間で自発的に授業についての対話が生まれるなど、効果的な自己研鑽の時間を設けることができた。

## (2) 課題

キーワード：取り組みの個人差、取り組む良さの実感、理解度の規準、交流活動の充実、習熟の方法、正確に速く、学びの自己調整力

- ・多くの児童が算数チャレンジに取り組んでいるが、一部の児童は取り組めていない。また、児童の取り組み方を見ると、問題を読むだけの児童、教科書への書き込みを行う児童、自主学习ノートにまとめる児童等、その取り組みには個人差がある。個々に目を向けると、年間を通して、取り組み方に変化がない児童が多く、取り組みの段階を上げるのが難しい。このような課題を解決するために児童に算数チャレンジをすることの目的や良さを伝えることを教師が年間を通して意識して取り組み続けることが大切であると考え。各学年の発達段階や個の取り組み状況について考慮しながら、指導や支援の方法を考える必要がある。また、算数チャレンジは家庭での取り組みが主であるため、家庭での協力を促すことが大切である。今年度、算数チャレンジに取り組んだ成果をもとに「算数チャレンジ」の取り組み方法や目的、その効果などを学級懇談会や通信等で保護者に発信していきたい。
- ・算数チャレンジに取り組んでいる児童とそうでない児童の差をいかに埋めていくかが課題である。また、算数チャレンジで概ね理解できた児童は、授業の進度が遅いと感じているようだった。そのため、理解できた児童に説明をさせたり、理解できていない児童のサポートをさせたりすることも、段階的に考えていく必要がある。
- ・理解度チェックを行っているが、その規準が明確でない。そのため、理解度チェックをする場合の規準を確認しておく必要がある。
- ・自力解決する場面を充実させる必要がある。授業場面で、児童が考えることを楽しむような発問や単元構成を工夫していくことが大切である。
- ・時間的な余裕が生まれたが、十分に交流活動を取り入れることができていない。また、学級によっては個別の支援が必要な児童の割合が多く、児童同士の学び合いをうまく取り入れることができていない。そのため、効果的な交流活動を促す発問の工夫や、環境整備の方法を模索する必要がある。
- ・算数チャレンジやスキルタイム（読み書き計算の基礎基本）に関して、職員間で認識や意識が統一できていない部分があった。児童が系統的に学習を積み上げることができるようになるためにも、算数チャレンジやスキルタイムの実践を定期的に交流するなどして、職員間での認識や意識のズレを適宜修正したり、実践の幅を広げたりできる機会を設定する必要がある。
- ・算数アンケートの結果から、多くの児童が授業の内容を理解できていると評価していたが、単元テストや標準学力調査の結果には反映されておらず、「知識・技能」「思考・判断・表現」双方とも課題を残している。2年間継続し、児童の間に習慣付いている算数チャレンジを生かしつつ、学力向上につながるような授業改善を行うことが今後の課題である。